

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

アイシールド21 水面の月

### 【作者名】

カニバサミ

### 【あらすじ】

泥門高校には二人のエースがいる。

一人は黄金の足を持つ40ヤード4秒2のアイシールド21。泥門高校1年、小早川 瀬那。

そしてもう一人は 誰も触れることのできない、水面の月。

泥門高校2年、榊原 水月。

これはクリスマスボウルに挑む、彼らの物語である。

## 40ヤード4秒2の男

朝早くから、一人の少年が泥門高校のアメフト部の部室を訪れていた。

彼の名前は小早川 瀬那。つい先日、アメフト部主将の蛭魔 妖一と同じくアメフト部所属の栗田 良寛からスカウトされ、アメフト部の主務として入部することになった。

そして今日がセナにとって初めての部活となる。事前にヒル魔から「打ち合わせ」があると聞いていたために、いつもより早く登校してきたのだった。

(ヒル魔さんに強引に入部させられちゃったけど、ほんとに僕なんかアメフト部に入っちゃっても大丈夫なのかな……  
でも主務だし、運動神経は関係ないよね)

その場で何度か深呼吸し、意を決してアメフト部の扉を開く。

「おはようございます……って、あれ？」

てっきりヒル魔と栗田がすでに部室に居ると思っていたのだが、そこに二人の姿はなく、見慣れない少女の姿があった。

美しい黒色の髪を腰の辺りまで伸ばした、可愛らしい小柄な女の子だ。椅子に腰掛け本を読みながら、片手にはコーラの缶を持っている。

少女はセナの存在に気づくと顔を上げた。顔立ちも整っており、かなりの美少女であることがわかる。

「す、すいませんー間違えましたあー!!」

セナはそのことに驚き、慌てて部室を飛び出した。

彼が知っているアメフト部の部員は二名。どこのチンピラのよ  
うな風貌をしたヒル魔と、関取にも引けをとらないほどの巨漢を持つ  
栗田だ。

そんな人物たちが所属している部活に、あのような少女がいるはず  
もない。間違えて文芸部の部室にでも入ってしまったのだろうか  
疑うが、そもそもアメフト部の部室は校舎の裏に一軒だけ佇む寂れた  
建物で、見間違っははずもない。

ここがアメフト部の部室であることをもう一度よく確認しながら、  
セナは恐る恐る扉を開けた。

「人様の顔を見て急に飛び出すとは、随分と礼儀知らずなやつだな。  
見たところ新入部員か？」

先ほどの少女が腕組をしながら、怒気を滲ませた声でそう言った。  
上目遣いで睨むその姿に、少しの間見惚れてしまう。こんな些細な  
表情が一つの絵になるほど、彼女は可憐だった。

はっ、と我を取り戻したセナは「すいません、すいません！」と何  
度も頭を下げながら、少女に恐る恐る尋ねた。

「あ、あの、ここアメフト部の部室で合ってますよね……？」

「無論だ。で、君の名前はなんという？」

少し変わった口調で話す少女に戸惑いを覚えながらも答える。

「1年の小早川瀬那です。アメフト部の主務をやらせていただくこと  
になりました」

「主務……？ 妖一のやつめ、選手も集めずなにをやっとるんだ」

虚空を睨みながらぶつぶつと呟く少女に、何かまずいことでも言うてしまったらどうかと冷や汗を流すセナ。

少しの間を置き、少女は改めてセナのほづを見た。

「失敬。私の名を名乗るのを忘れていた。2年の榊原 水月だ。

一応、アメフト部に所属している」

「よ、よろしくお願いします。」

……あの、榊原さん、一つ聞いてもいいですか？」

「なんだ。私に答えられる範囲でいいなら何でも答えてやるっ」

水月の言葉を聞き、疑問を口にしようとした刹那、水月から待ったの合図が出る。

「ふふ、分かったぞセナくん。私に彼氏がいるかどうか知りたいんだな？」

安心しろ、私はフリーだ。……だが、セナくんはちょっと細身すぎるな。私に告白する前に、もっと男らしさを身につけてから

「

「ち、ち、ち、違いますっ!!」

女性への免疫をまったく言っていないほど持ち合わせていないセナは、顔を真っ赤にさせながら大声で叫ぶ。

そんなセナの様子をどこか面白そうな様子で見る水月に、セナは気づいていなかった。

「そこまで嫌がることはないじゃないか。私でも、傷つく」とはある

……」

目の端に涙をためながら、すすすと小さく鼻をすする水月に、セナは見ていて哀れなほど狼狽し、果ては土下座まで始めた。

そんな空間に乱入者が現れた。蛭間 妖一である。ヒル魔は土下座して頭を床に擦りつけているセナと、笑いを必死に堪えながらぶるぶると震えている水月の両者を見やった。

「ケケケケ、随分と愉快なことになってんじゃねーか」

「妖一か。久しぶりだな」

「アメリカ旅行はどうだったよ、糞狸」

「ふふふ。なかなか楽しめたさ。だがやはりこの国に戻ってくるとほっとするな」

「ケケケ、なにはともあれお前が戻ってきたのはグッドタイミングだ。

おらっ、いつまで床に抱きついてんだ糞チビ！ さっさと朝練行くぞー！」

ヒル魔は未だに土下座を続けているセナの尻を勢いよく蹴飛ばすと、片手でセナの襟を引っ張り、もう片手で銃を空に向かって乱射しながら運動場へ向かった。

「またしばらくは、退屈せずに済みそうだ。時が来るまでは、こいで馬鹿をやっているのも良い……」

そう呟きながら、すでに遠くなってしまうた彼らの後ろ姿を見つめて笑みを浮かべる。

そしてまた、彼女も彼らと同じようにグラウンドへ向かうのだった。

「み、み、水月ちゃん……ん！ お帰りー！！」

「ああ、ただいま良寛。おっと、そのまま抱きつかないでくれよ？ お前の馬鹿力で締め上げられては、私の身など木っ端微塵になってしまうからな」

熱い抱擁を交わそうとしていた栗田は、直前で立ち止まった。

「あはは、「ごめんね水月ちゃん」

「よいよい。それにしても、二月見ない間にまたデカくなったのではないか？

ラインマンは体が丈夫でなくてはならないが、食い過ぎで病気にでもなったら本末転倒だぞ」

申し訳なさそうに頭を掻く栗田の大きな腹を、水月がコーラを飲みながらぼんぼんと叩く。

「でもこれで四人だねっ！ 創部以来初めてだよ」

嬉しそうに語る栗田の影で、セナが「僕、主務のはずなんだけど……」と呟いた。

そういえばと、セナは先ほどの一件で有耶無耶にされた疑問を、改

めて水月に問いかけた。

「榊原さんってマネージャーをしてるんですか？ それとも僕みたい  
に主務」

「そいつは選手だ」

答えたのは、ヒル魔だった。セナは信じられない、といった風に目  
をパチパチさせる。

「でも榊原さん、僕より小柄だし（たぶん女子全体で見ても小柄な  
部類に入ると思うんだけど）、そもそも女性だし……。アメフトって  
相手と、こう、ぶつかり合ったりするんですよ？

いくらなんでも危ないんじゃない？」

そんなセナの不安をよそに、ヒル魔は愉快そうに笑った。

「ケケケ、だつと糞狸。ずいぶんと舐められてんじゃないか」

「ふむ。特に人にどう思われていようが特に気にはしない」

そう言いつつ、いそいそと鞆の中からジャージを取り出す。

「私も練習に参加しよう。生憎、今日はユニフォームを持ってきてい  
ないが……。少し待っている。着替えてくる」

数分後、ジャージに着替えた水月と、ユニフォームに（強制的に）着  
替えさせられたセナの前で、ヒル魔が40ヤード（36メートル）走

測定を提案した。

「糞狸はジャージで本格的な練習はできねーし、そろそろ時間的にも余裕がねえ。今日はこれやって終いにすっぞ」

まず第一走者は栗田。結果は6秒5。

その結果がお気に召さなかったのか、ヒル魔は執拗に栗田の体に蹴りを入れる。

第二走者はヒル魔。5秒1。

自己ベストタイだったらしく、かなり上機嫌になるヒル魔。栗田もまるで我が事のように喜ぶ。

そして第二走者

「私の番か」

静かにスタートラインに立つ水月。運動をするために、髪は後ろで纏めてある。その姿にセナがまた一瞬見惚れたという事実は割愛する。

「アメリカ帰りで疲れてた、なんて言い訳は聞かねーからな」

「ふふふ、手厳しいな。まあ善処するとも」

ヒル魔の軽口にも微笑で返す。

カウントダウン      スタート。



そしてゴールへ一直線に進む。

ゴール地点で栗田がストップウォッチを押した。

結果、5秒8。

「まずまずだな」

「ケケケ、さすがに糞デブより遅くはなかったか」

最後に第四走者。

スタートラインについたセナを見て、水月はヒル魔に声をかけた。

「セナ君を本当にアメフト部に入れるつもりなのか？」

水月の問いは言外に、セナを選手として使うつもりなのか、という意味を含んでいた。

「まあ見てろ。上手くいけば、お前に次ぐもう一人のジョーカーになるぜ」

ニヤリと笑みを浮かべたヒル魔から視線を外し、再びセナを視野に収める。

「なるほど、お前がそこまで言うのなら期待してもいいんだな？」

「ケケケケー！」

ついにセナがスタートを切る。ロケットのような飛び出しに、水月



「Y a a h a a ! 見やがれやつの本領を！」

ちゃっかりタイムを測っていたヒル魔が、ハイテンションでタイムを栗田と水月に見せつける。

「高校記録どころじゃねえ！ プロのトップスピードだ。

こんなもん誰にも止められねえ！」

ヒル魔の手に握られたストップウォッチ。そこに表示されていたタイムは 4秒2だった。

「く、ふ……ふふふ……ふははははははは！」

素晴らしい！素晴らしいぞセナ君！はははははっ！」

水月が腹の底から笑い声を上げる。愉快だ。堪らないと。

アメフトは個人競技ではない。個がどれだけ優れているようとも、集団の前では意味がない。だからこそ彼女は待っていた。

寄せ集めではないチームメンバー。それも自分以外のエース級の存在を。

ヒル魔も栗田も決して凡才というわけではない。しかしアメフトというゲームの性質上、相手からポイントをもぎ取るという役割を担う存在が彼女以外にはいなかった。

行ける。クリスマスボウルに！

ケルベロスに追われ悲鳴を上げるセナの姿を見つめながら、三人は同じ想いを胸に抱いていた。

「そついえばもつすぐ大会だね。  
いつだっけ、大会？」

「明日」